



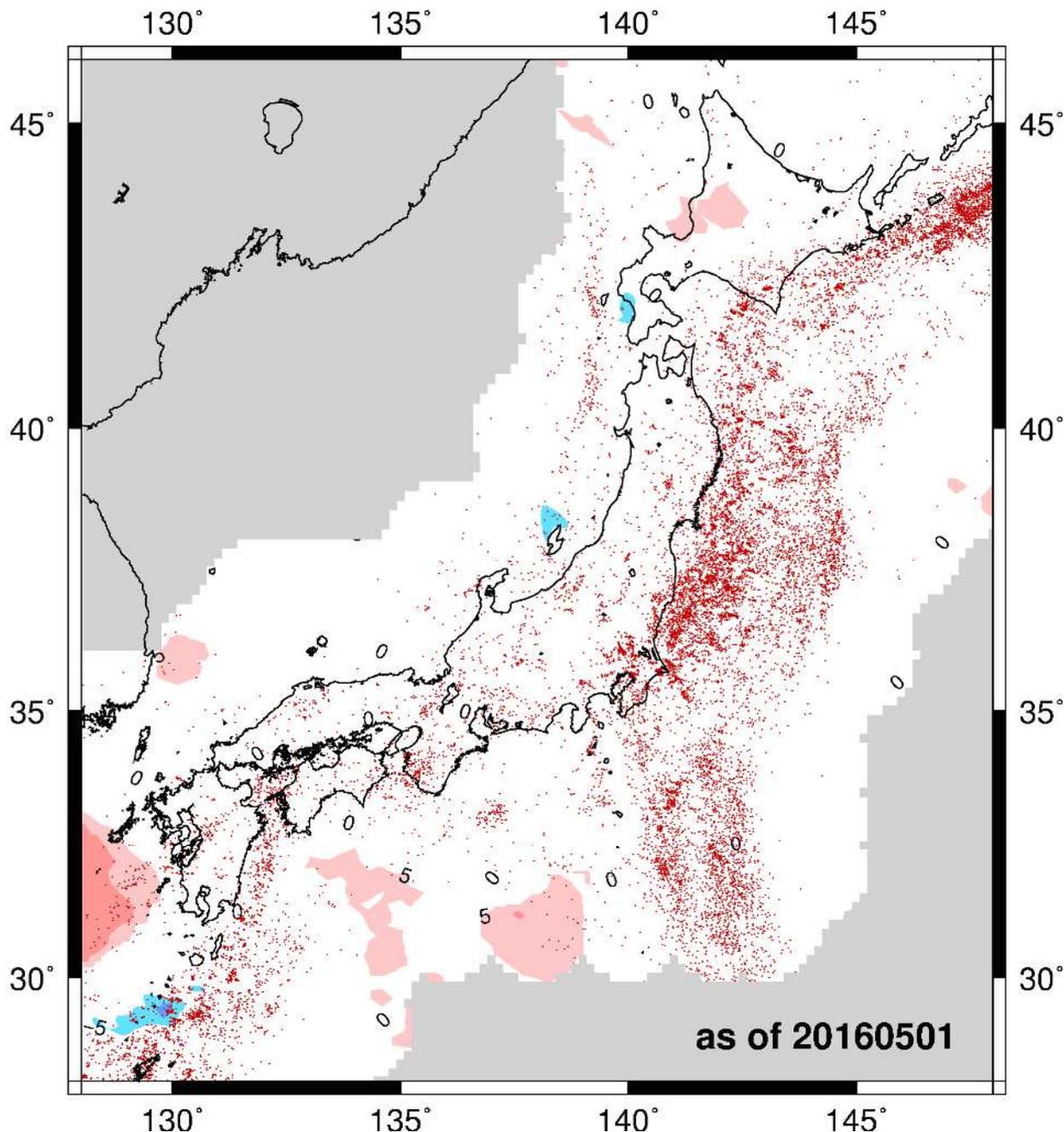
DuMA ニュースレター

2016年05月09日

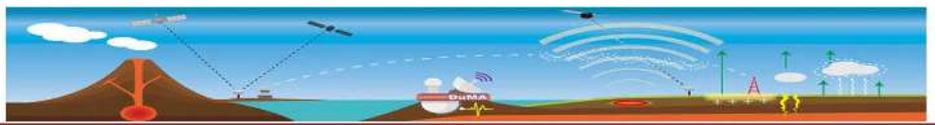
日本列島全域の地下天気図®

今回は日本列島全域の地下天気図®（海域の **M7.5 以上の大地震**がターゲット）です。M7.5 というと津波注意報が出る可能性が極めて高くなる地震の大きさです。逆に M7 程度であれば、海面変動は発生しますが、津波で被害が出る事はまずありません。

2016年5月1日時点の地下天気図が下になります。



5月1日の時点で、大きな青い領域（地震活動静穏化領域）は出ていません。ただこれからも繰り返し述べる事になりますが、「地震は異常が終了してから発生する可能性が大きい」という事です。また図中の赤い点はこれまでに発生した地震です。東北沖や北海道沖で地震活動が活発な事がわかります。



右下に今年1月1日の段階の地下天気図®と昨年10月1日の地下天気図®をお示しします(右下の数字が年月日を表しています)。重要な異常(青い領域)として、日本海に静穏化領域が存在していたのが、消えている事がわかります。

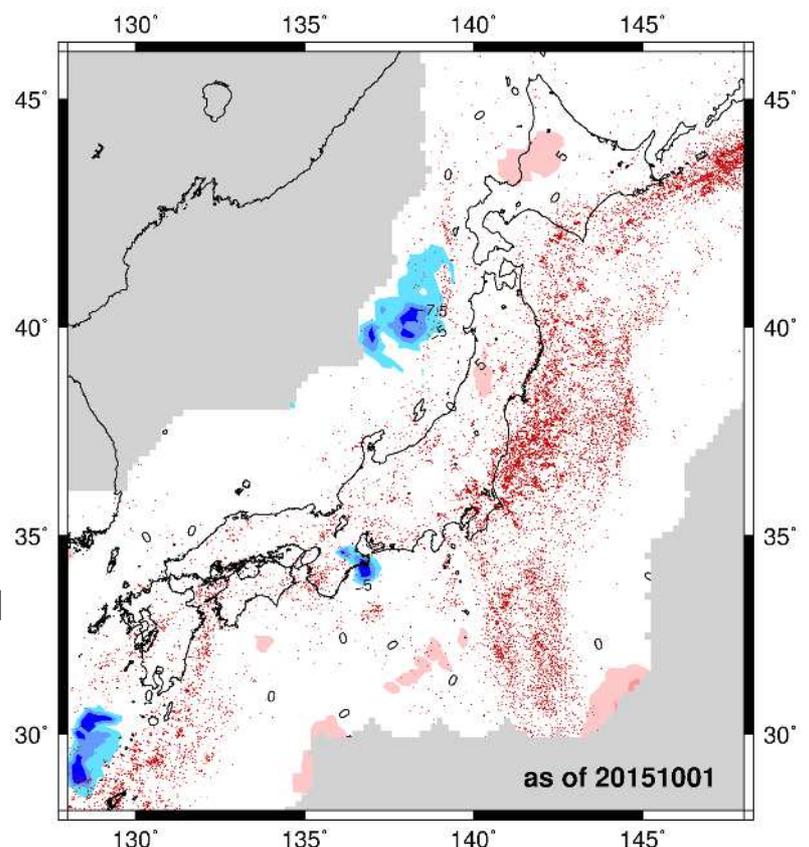
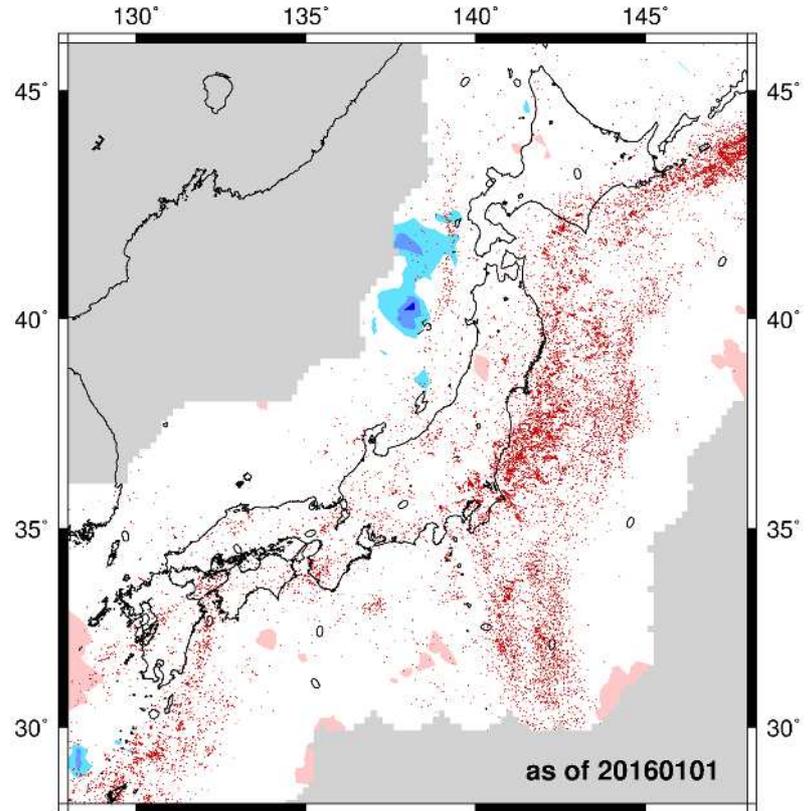
昨年の10月の段階で表れている九州西方の異常は11月14日にM7.1の地震が発生していますので一度は解消されましたが、5月6日頃から中規模の地震が頻発しており、注目しています。

日本海東縁というのは、近年では奥尻島に大きな津波被害をもたらした1993年の北海道南西沖地震(マグニチュード7.8)、その南側では1983年に日本海中部地震(マグニチュード7.7)が発生しています。

この日本海東縁というのは、歴史的にも大きな地震が一系列に並んで発生しています。最先端の地球科学の知見では、ここにプレート境界が存在すると考えられており、例えば10万年後には新しい“海溝”ができていく可能性が大きい場所なのです。

この南側への延長が古くは新潟地震や、2004年の新潟県中越地震を発生した地域につながっており、「歪集中帯」と最近では呼ばれています。

現在静穏化の異常が消失した場所(秋田沖)では、過去大地震が発生した記録が無い事から地震学的にも将来、大地震が発生する可能性が大きいと考えられている地域です。このような大地震が当然発生すべき場所でまだ地震が発生していない場所の事を地震学の教科書では『**第一種空白域**』と呼んでいます。





今回の地下天気図®では日本列島全体を解析していますが、海域の大地震にターゲットを絞っているため、熊本の地震を解析するには適したパラメータではありません。今後は地域ごとにその地域に最適と考えられるパラメータで解析を行って、情報を提供していきたいと思ひます。

参考

日本海東縁の第一種空白域 ©DuMA



日本海東縁では、上の図のように大地震が帯状に並んでいます。この中で地震学界で注目されているのが秋田沖の地域で、ここではまだ大地震発生の記録がありません。

今後のニューズレターで空白域の説明やこれと関係する新しい概念である『歪集中帯』についても説明していきたいと考えています。